

主観性と客観性を共存させる方法による臨地探究に基づく 地域創生デザイン課題のデザイン

Designing Themes of Regional Revitalization on the basis of On-Site Inquiry by a Method of letting
Subjectivity and Objectivity Coexist

藤井 晴行^{*1}
FUJII Haruyuki

篠崎 健一^{*2}
SHINOZAKI Ken-ichi

^{*1} 東京工業大学
Tokyo Institute

^{*2} 日本大学
Nihon University

This paper discusses the understanding embedded in the traditional form of vernacular houses and the landscape composed of those houses and other traditional forms. The authors introduce “Photo Diary” - a form of expressing findings in field-works and a process of associating findings with each other. “Photo Diary” is composed of a photograph expressing a finding in a field-work, the description of remarkable facts taken in the photograph, the description of interpretation of the facts, and the observer’s first-person experiences of the facts. Every photo diary is associated with each other to construct a whole structure of the findings. The authors have been exploring the spatial schema underlying the form of vernacular houses. On the way of exploring, we have been accumulating pieces of findings. This paper explains a process of constructing design inquiries for regional revitalization of Izena Village, Okinawa, where traditional Ryukyu houses and landscapes are remaining.

1. はじめに

デザインはものごとのありたき姿やあるべき姿を描いてそれらを実現させる方法を考案する行為である。この行為には客観的な知識に基づく合理的な思考だけではなく主観的な信念に依拠する直感的な判断がともなう。本報告は伝統的な様式を継承する民家が多く現存する沖縄離島(伊是名島)の集落(伊是名区)を<臨床>のフィールドとする「空間図式の探究」とそこから発展した地域創生デザインの課題デザインのプロセスを事例として、空間図式探究という研究から地域創生デザインという実践に至る経緯、主観性と客観性が共存するデザイン・プロセスを独善に陥らないように進める方法として筆者らが構築しつつある写真日記の作成と構造化という発想法の適用の実際について述べるものである。写真日記は写真、事実の記述、事実に関連して考えたり気づいたりしたものごとの記述、写真日記作成者の経験の記述からなる臨地調査の記録である。写真日記をできるだけボトムアップで構造化する過程で新たな気づきが生まれたり潜在的な問題意識が顕在化されたりする。この過程を通して客観的な事実と主観的な考えから<臨床の知>[中村 1992]が顕在化されていると実感している。

私たちが探究している<臨床の知>は伝統的な民家や集落の形態に埋め込まれている知である。伝統的な民家の様式はそこに住まう人と風土や社会との良好な関係をつくる仕方が長い年月に渡る試行錯誤を経て形成されてきているものである[和辻 1931]。このような<臨床の知>は私たちが、生活空間を形成して、生きる上で重要な役割を担っている[中村 1993]。伝統的な民家の形態や集落景観の姿は近代的な建築技術の発展によって変容しつつある。生活の快適性や安全性、築造や運用の効率性や経済性に注目すれば、これらの変容は自然な成り行きであり、生活の質の向上のために変容されざるを得なかったある時代の「伝統的」な形態を現代の生活に適合させることは

合理的ではないという主張には一理ある。一方、機能本位の観点によって、それらでは測れない生活空間の象徴的な意味や風土や文化に根ざした固有の質は消滅しつつある。「近代科学の発展によって、そのために見えなくなってしまったもの[中村 1993]」、「人間の知恵として、人間の能力として持っていないながら、近代科学のあまりにも見事な成果に目を奪われてしまい、見えなくなったもの[中村 1993]」が、伝統的なものごとに潜在しているとすれば、それらの<臨床の知>を顕在化し、現代の住意識と対応づけることによって、近代的な技術の導入によって存亡の機に直面している伝統的民家や文化的景観とそこに埋め込まれた知を継承する術を見いだせるのではないかと考えている。

2. 方法

私たちが 2014 年 9 月から今日に至るまで伊是名島で継続している「空間図式の探究」を<臨床の知>という視点から再考する。「空間図式の探究」は学術的な関心に端を発する調査・研究であるが、伊是名島の日常生活に参与する期間が長くなるにつれて、調査・研究の成果を地域創生のためのデザイン活動に活用しようという意識が強くなっている。

2.1 本研究で注目する<臨床の知>の眼差し

デザインに関連づけて語られる<臨床の知>[中村 1993]は近代科学の普遍性、論理的一義性、客観性によって捨象される<コスモロジー>、<シンボリズム>、<パフォーマンス>に光をあてている。<コスモロジー>は個別の「意味に充ちた空間」への眼差し、<シンボリズム>は「機能本位ではなく、もっと意味や固有の質を持った空間を生かそう」という多義性、多面性への眼差し、<パフォーマンス>は身体を環境に曝すとともに環境からの働きかけを蒙るということへの眼差しである。

2.2 経緯

2014 年 9 月の最初の訪問から直近の 2018 年 3 月の伊是名村での調査報告会までの 3 年半の間に 20 回の臨地調査を行

っている。探究は、個別の探究課題の探究と、通奏的な課題発見や深化のための探究の同時進行による。前者は例えば、集落民家の実体的な構造や空間構成の整理から民家の変遷過程を推論するといった視点や方法を限定した探究であり、後者は写真日記によるフィールドにおける発見的探究である。探究が相互に影響し合うにより、探究の視点や内容が変化する。また、生活と空間構成についての議論のために、民家の空間構成や家具の配置の実測調査と住まい方についての住み手の語りの採集を継続している。

これらの調査によって得られた成果を 2016 年 3 月に伊是名村の教育委員会に報告したことから、伝統的な民家や文化的景観が残る伊是名区後辺(くしひん)地区の全民家(49 棟)を官学共同で調査する機会を得る。この調査を遂行するための研究サテライトとして、2017 年 4 月より、伊是名区前浜(めーひん)地区の民家(空家)を伊是名リビング・ラボ(臨地研究室)として利用している。大学院生 2 名がほぼ常駐して生活し、伊是名村の祭祀や行事に参加し始めたことから、私たちと「空間図式の探究」に関する伊是名村の居住者や伊是名村役場の関心が高まっている。これらの方々と関わり方が深くなるにつれて、私たちは村の居住者に近づいた視点を持つようになっている。

上記の調査を含むこれまでの探究の成果を 2018 年 3 月に村役場に報告したことを契機として、後辺地区の伝統的な民家と文化的景観の生きた生活の中にある継承と再生、及び、地域創生を実現する方法の計画と実施に協力することを村から求められている。

2.3 写真日記

＜臨床＞のフィールドにおいて、その場所を経験し、気づいたものごとを記録する写真日記を作成し、写真日記を構造化することを繰り返すことによって、空間図式を顕在化するという方法を実践している[篠崎 2015、福田 2015]。場所を経験することとは空間図式を復号化することであり、写真日記を作成することは場所の経験を記号化することである。

写真日記は実際の場所を経験して気づいたものごとを視覚的な情報(写真)とことばによって記録する媒体である[藤井 2015]。写真と三種類の記述(事実記述、解釈記述、経験記述)からなる。写真は場所の実体的な構造を映す。ことばでは記述できない情報を視覚的に記録したり、自覚していない情報を自覚している情報と一緒に記録したりする。ことばによる三種類の記述は、場所を経験によって気づいたものごとを表現する、経験者がいる場所に関する事実、事実と経験を関連づける日記作成者の解釈、経験したものごとを表わす。

写真日記によって表現される気づきはある場所を経験するという事実を契機として生まれる気づきである。必ずしも客観的な事実から論理的に導かれるものごとではなく、主観的であり、非論理的に発想されるものごとである。写真日記において三種類の記述を用いることには、客観的な事実、一人称の(主観的な)経験、客観的な事実と主観的な経験を橋渡しする客観的な法則性または主観的な解釈を明示的に区別して扱うという意図がある。そのことによって場所の経験における気づきや写真日記の構造化の過程で生じる気づきを観察可能な事実を設置させ、主観性と客観性を共存させている。

3. 地域創生デザインの課題

これまでに発想された地域創生のデザイン課題を＜臨床の知＞に関連づけて説明する。

3.1 普遍性に駆逐された固有性に再び意味を持たせる

かつては利用されていた人工物が利用されずに放置されているのは、利用されていた当時にはその人工物に与えられていた意味が、現在は、失われてしまっているからであろう。石垣や繽紛やフクギには強風から家屋を守る役割を担うという意味があった。その役割の意味は、強風に耐え得る今日の家屋にとっては、必ずしも強くはない。地下水を汲み上げる井戸の意味も上水設備によって弱められている。しかし、それらが持つ全ての意味が消滅したわけではない。それらは、琉球地方の伊是名の特徴的な景観を形成するという意味を持つし、それらが活躍していた時代から今日に至る軌跡を想起させるという意味を持つ。これらの意味にさらなる価値を見出し、安全性や利便性の観点からは、現在は放置されてしまっているものごとを利活用する方法を考える必要がある。

琉球地方に固有の文化的な景観は琉球という風土における人々の日常生活に根ざしているとともに、琉球地方の人々の人と風土との関係についての自己了解が具現化されている。

3.2 固有の文化と普遍的な要求を共存させる術を探す

琉球の伝統的な民家のファサードの開放性は改築によって変化しつつある。例えば、木製の障子や雨戸をアルミサッシュのガラス戸に変更したり、一番座の掃き出しの開口部を腰壁のある開口部に改造したり、一番座の前の雨端をコンクリート・ブロックの壁で囲ったりというような改築の事例が散見される。改築がなされても二番座の前は、アルミサッシュのガラス戸であっても、開放されており、いひやーじゅーでの習慣は続いている。一番座を寝室として用い、そのためのプライバシーを確保しようとする住意識と二番座の前を訪問者に対して開放しようとする住意識が共存している。安全性や快適性などの住宅性能を向上させることは大切なことである。しかし、その手段としてアルミサッシュやコンクリート・ブロックのような普遍的な建築部位を不用意に適用することは、伊是名の生活様式や民家の形態として具現化されている琉球の文化の固有性を失わせるかもしれないという危険性を孕んでいる。

建築部位の改築によって意図されていることを充足し、かつ、伊是名の生活や民家の好ましい固有性を継承し得る技術を開発することが課題である。軽微な改築においては、住民が確認申請を受けずに自分の裁量で材料や構法を選択する。この選択が住意識を充足する費用対効果の観点からなされることは想像に難くない。このような選択をしたとしても、風土や文化に根ざした景観が形成され続けるような材料や構法を考案することが一つの方向である。

3.3 普遍の技術を加えて固有の知を更新する

伝統的なものごとの姿は琉球地方に固有の知の現われである。家屋や集落を現代の生活に適合させるために導入された住宅設備や建築材料は、琉球地方の家屋や集落のために独自に開発されたものではなく、日本全国のどこでも用いることができるように開発されたものである。これらが同じ空間に同時に存在することが違和感を生んでいると考えられる。例えば、屋敷囲の石垣やコンクリート・ブロックは家屋を強風から護るために設置されている。かつては海から採取してきた珊瑚石を積んで築造されていた石垣に籠められた家屋を風から護るという意図が工場で生産されたコンクリート・ブロックの塀を築造することによって充足されるようになってきている。石垣の採取が禁止されたこと、コンクリート・ブロックが登場した当時には近代を象徴するものであり、石垣よりも施工が容易で堅牢であると売り込まれた

ことなどが、関与していると考えられる。一方では、石垣が形成する景観を継承しようという動きもある。

培ってきた伝統的な＜臨床の知＞が普遍的な技術によって駆逐されつつある状況であると解釈することも可能であるし、伝統的な＜臨床の知＞にこの地域にとっては外来の普遍的な技術を付加して新しい＜臨床の知＞を創造する過渡期の状況であると解釈することも可能である。意図を充足する手法が、外来のものであっても、風土や文化と適合するように姿を変え、伝統的な＜臨床の知＞と融合していくことによって、違和感は次第に解消されていくのかもしれない。

3.4 固有の知と普遍性の知との好ましい重なり方を探る

家屋、石垣、屋敷林、電柱、電線などは生活に適した環境を形成するために設置された人工物である。伝統的な様式の家屋や石垣や屋敷林は琉球地方や伊是名地域に固有の景観を生み出している。この景観が好ましいと感じられるのは、それが、長い時間をかけた試行錯誤を経て獲得された、この風土で生活する環境を創出するための知の現れであることを無意識のうちに感じ取っているからではないだろうか。このような景観に電柱や電線が現れると、風土に根ざした文化的景観を愛でようとする眼には、違和感があるものに移る。その理由は、一方、電柱や電線は日本のいたるところで用いられている、日本では固有性のない人工物であるからではないかと考える。

地域の生活に根ざした固有性のある＜臨床の知＞の現われと地域を限定しない普遍的な知の現われが意味の上では共存できないまま、視覚的に具象化された姿で重なっているからではないだろうか。

4. おわりに

私たちが 2014 年 9 月から今日に至るまで伊是名島で継続している「空間図式の探究」の成果を地域創生のデザインに活用する課題を＜臨床の知＞という視点から解釈した。

参考文献

- [藤井 2015] 藤井晴行: 知をデザインする, 一人称研究のすめ - 知能研究の新しい潮流(諏訪正樹, 堀浩一編著), pp.151-170, 近代科学社, 2015.
- [藤井 2016] 藤井晴行: 記号と実体を結びつける空間図式を「写真日記」によって顕在化する一人称研究, 人工知能学会全国大会(第 30 回), 2016.
- [藤井 2017] 藤井晴行, 篠崎健一: 建築空間の認識と創生における知の身体性の現れ—空間図式の研究, 人工知能学会全国大会(第 31 回), 2017.
- [福田 2015] 福田隼登, 藤井晴行: 身体性に注目した空間体験の図式表現方法に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 80 (709), pp.559-567, 2015.
- [篠崎 2015] 篠崎健一, 藤井晴行, 片岡菜苗子, 加藤絵里, 福田隼登: 空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく研究—写真日記を基礎資料とする KJ 法の試み, 認知科学 第 22 巻・第 1 号, pp.37-52, 2015.3.
- [中村 1992] 中村雄二郎: 臨床の知とは何か, 岩波書店, 1992.
- [中村 1993] 中村雄二郎: デザインする意志, エッセー集成 6, 青土社, 1993.
- [和辻 1931] 和辻哲郎: 風土—人間学的考察, 岩波書店, 1931.

謝辞

本研究は科学研究費補助金「挑戦的萌芽研究(15K12295、代表: 篠崎健一)」、同「基盤研究(B)(一般)(16H03014、代表: 藤井晴行)」を受けて遂行している研究のプロセスと成果を題材とするものです。また、臨地調査や調査結果の整理と分析について、日本大学篠崎研究室のメンバー、東京工業大学のメンバーの協力を得ています。ここに謝意を表します。